

フェアトレードとは、海外の生産者がつくったものを公正な価格で買い取り、生産者の自立を図る新しい貿易のカチ。「生活のなかの国際協力」を実践されている方をご紹介します。



荒山優子(あらやま・ゆうこ)さん 愛知県刈谷市

最近発売されたばかりのオリジナルカフェタンブラー。6種類そろったデザインのなかから荒山さんが選んだのは、花柄のモンゴルのフェルトと、ユーモラスな魚が描かれたアフリカの布を素材にしたものです。「花のかわいさが気に入って自分用に、魚のほうは釣り好きの主人のために買いました」

ピースコーヒーを長く愛飲している荒山さんは、ご主人ともども、朝と夕食後にコーヒーを楽しむそうです。車で出かける時は、自分で丁寧にたてたコーヒーをタンブラーに注いでテイクアウト。好みの一杯を外先でも味わっています。

使い心地を聞いてみました。「胴体にちょうどいい感じのくぼみがあり、持ち運びにとっても便利です。これまではコーヒーショップで買った別のタンブラーを使っていましたが、こちらのほうが中身が冷めにくく、時間がたっても味が落ちないのいいですね」

夜はコーヒー片手に、仕事や趣味でパソコンに向かうことも多いという荒山さん夫妻。パソコンにコーヒーは大敵ですが、「底にゴムが張ってあるから滑りにくいし、万一倒れてもすぐにはこぼれないので、横に置いて安心」といいます。

「タンブラーを持ち歩いて、町なかのカフェでコーヒーを入れてもらえば、紙カップを無駄にすることもない。そんな使い方が広がっていけば素晴らしいと思います」。環境にやさしい生活スタイルを大切にする荒山さんの思いです。



PWJでは、オンラインの「ピース ウィンズ・ショップ」などを通じて、フェアトレードに取り組んでいます。収益は、PWJの活動に役立てられます。 <http://www.peace-winds.org/shop/>

支援地レポート

東ティモール

コーヒーの収穫期を前に、生産者組合「カフェ・タマイラウ」の総会が開かれ、選挙で代表や会計担当者などが選ばれました。2006年は春に起きた騒乱のため組合の活動も大きな影響を受けましたが、新しいリーダーのもとで結束して収穫作業に臨む体制が整いました。総会では、決まったばかりの組合ロゴが入ったTシャツが、ユニフォームとして配られました。



イラク



増え続けている国内避難民が仕事の機会を得られるようにするため、北部クルド人自治区の南側に隣接する地域で、建設や美容技術の研修事業を始めました。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) との協力による新たなプロジェクトで、建設技術を学んだ人は実際に店舗を建ててビジネスを始める予定です。学校の修復や教室の増築による教育支援も行っています。

スーダン

ボー市内の小学校、診療所など8カ所に建設していたトイレが完成し、地元住民に引き渡しました。そろそろ本格的な雨期に入りますが、現場チームは休む間もなく、ボーの周辺に点在する村々を回り、井戸のニーズ調査をしています。地方の村では市内よりさらに生活環境が劣悪です。帰還した人がきれいな水を飲めるよう、井戸の建設に向けた調整を進めています。



支援のプロを、
世界の現場へ

地表下 15mの恵み

— リベリアでの水支援 —



乾期だというのに鮮やかな緑の森が広がるリベリア北西部ロファ州。内戦の歴史を知らなければ緑の美しさに息をのんでしまいそうだ。学校の敷地にほど近く、真新しい井戸から水がキラキラと流れている。少し歩けば銃痕だらけの壁だけとなった家を見つけることができる。

ピース ウィンズ・ジャパン (PWJ) は住民が戻った村や学校の敷地内などで井戸をつくり続けている。スコップなどで掘った穴に、請負業者が直径約1メートル、高さ約60センチのコンクリート製リングを次々と押し下げ、土が崩れないようにしていく。

地下水脈が流れるのは地表下10メートルから15メートルの間。工事は順調でも4週間はかかる。その後、上部をコンクリートで固め、手押しポンプを取り付ければ完成だ。井戸ができると、そのまわりには、水くみの重労働から解放された女性や子どもたちが集まってくる。

「援助団体が井戸をつくらせている」。その情報が、故郷を追われたままの難民・避難民たちの帰還の気持ちを高める。

すべての人に水を——。内戦が終わり、難民たちの帰還が進むリベリアで、私たちは井戸をつくり続けている。

— リベリア —

人口は約330万人(2005年)、面積は約11万平方キロ(日本の約3分の1)。1980年代以降、政治の混乱が続いた。激しい内戦で多くの人が故郷を離れ、国内避難民や難民となって首都周辺や隣国のシエラレオネやギニアに避難。2003年に和平が成立し、難民・避難民の帰還が始まった。2005年10月の大統領選挙ではアフリカで初めて女性大統領(ジョンソン=サーリーフ氏)が選出された。

PWJは2001年からシエラレオネでリベリア難民のためのキャンプを運営。2004年3月にリベリア国内での支援を始めた。



住居再建のための資材配布

住居再建と合わせ井戸・トイレ

欠かせないものの例として日本ではよく「衣食住」という言葉が使われます。「水」が含まれていないのは、日本が水に恵まれた国だからかも知れません。PWJはリベリアで、きれいな水を確保できるように、井戸の建設を支援しています。

井戸はコミュニティーや学校につくります。不衛生な環境が原因となって病気が発生する心配もあるため、合わせてトイレの設置を進めます。そして、衛生教育研修を開き、手をよく洗うことや井戸の敷地のなかに家畜を入れないこと、管理・



トラックを通すためには橋の整備も

修理の方法などを説明して井戸を引き渡します。

PWJの井戸・トイレ建設は住居や学校の再建と合わせて進められています。これまでに支援した住居はロファ州とボミ州合わせて約6150世帯。学校は21校。建設した井戸は計72本、トイレは649基のほります。

帰還促進へ滞在・宿泊施設を運営

リベリアでは全人口の4分の1近い約80万人が難民・避難民になったともいわれています。このうち2007年3月までに国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の支援を受けた人だけでも約42万人が故郷に帰還しました。

PWJは2005年からロファ州フォヤ郡で一時滞在施設の運営にあたってきましたが、2006年にはボインジャマ郡の一時滞在施設とコラファン郡の簡易宿泊施設の運営も開始しました。2006年だけで合わせて3万人以上の帰還民を受け入れ、のべ8万2000人以上に食糧を配布しました。施設内で食事を出すほか、帰還する人たちに決まった量の食糧を渡します。

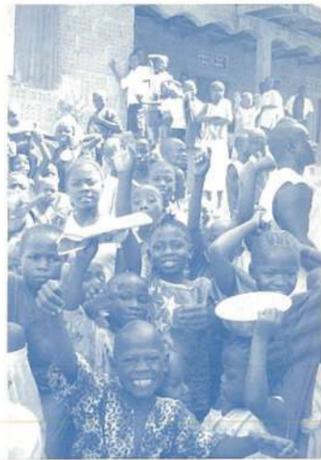


トラックで帰還してきた人びと

教育復興へ学校給食も支援

学校ができて子どもたちが学校に出てこないこともあります。農作業や水くみに駆り出されてしまうためです。教育復興を進めるためPWJは2006年9月から学校給食用の食糧の配布を行っています。

学校ではこの食材を使って給食を調理し、子どもたちに提供。「学校へ行くと勉強を覚えてもらえるだけでなく食事を出してもらえると、さらに多くの子どもが学校に来ることを期待しています。子どもたちは顔じゅうに小麦の粒をつけながら、給食をほおぼっています。



給食にうれしそうなお子どもたち

高等専門学校の修復が進行

人材育成のためPWJは、ロファ州にある全国でも3校しかない国立の高等専門学校の修復を進めています。学校はかつて州を代表する施設でしたが、内戦の後期にほとんどの建物が破壊され、現在は一般教育コースの授業のみが幼稚園と教会を使って行われ、職業訓練コースは閉鎖されたままです。

第一期の事業では一般教育コースの教室と教員用事務所、そして給食のための食堂とキッチン今年7月までに完成させ、9月の新学期から使用することをめざしています。その後は職業訓練コースの教室や車両整備場、図書館などの修復を計画中です。



修復進む国立高等専門学校

きれいな光景の奥にある不安

PWJリベリア駐在スタッフ 三浦真穂

以前はモンゴルに駐在し、子どもの保護施設「ホッパイル」運営などの事業を実施していましたが、この5月、リベリアに着任しました。

赴任に先立つ4月の出張で感じたのは、リベリアの美しさでした。緑が広がり、帰還した人たちの表情にも明るさがあります。

しかし、廃墟となった建物が内戦の悲惨さを感じさせ、住民たちは遠くの川へ水をくみに行っています。帰還後はPWJなどの援助団体から食糧の配布もありますが、それもあと1回くらい。その後は荒れた土地で再び農地を開き、収穫を上げていかなければなりません。現地スタッフや住民たちと協力し合いながら、帰還した人びとが生活を再建するための支援をしていきたいと思っています。



村に生きる リベリア発

二度の難民生活を経て故郷に戻ったランドルフ・タンベイさん(32歳)

長い難民キャンプでの生活に終止符を打ち、生まれ故郷のパンブロー村に戻った。「今の暮らしは夢のよう」という言葉に、実感がこもる。

最初に村を追われたのは20歳を目前にしたころ。農業で生計を立てていたが、反政府勢力による反乱の戦火が迫り、妻とともに隣のギニアへ逃れた。3年間を難民キャンプで過ごしたが、フランス語圏のギニアでは、地元の人とのコミュニケーションも満足にできない。「リベリアはギニアに戦争を仕掛けようとしている」と治安部隊ににらまれ、町へ出かける自由もなかった。戦闘が終わったと聞き、妻とパンブローに戻った。

比較的穏やかな日々がしばらく続いたが、2001年4月1日の早朝、村は武装勢力の攻撃を受け、村人2人が射殺された。「とにかく大急ぎで茂みに身を隠した。兵士が何度も捜しに来た」。携えてきた食糧も数日後には底をついた。「シエラレオネの難民キャンプへ行こう」。タンベイさんは妻に告げた。

苦難に満ちた逃避行の末、PWJが運営するキャンプにたどり着き、家を建てた。配布される食糧を補うため、薪を集めて売ったりもしたが、自ら畑を耕すことは許されなかった。

2度目のキャンプ暮らしも4年が過ぎたころ、帰還の話が持ち上がった。「家も学校もトイレもないと聞いて、ためらう仲間もいた。でもPWJが家の修復資材を配ってくれると知って故郷に戻る決心がついたんだ」

久しぶりの故郷で再び農業に取り組んでいる。2006年は天候不順で作物の出来が悪かったが、タンベイさんは「今年こそは」と収穫に期待を寄せている。耕す喜びをかみしめながら。



故郷で生活再建に励むタンベイさん一家

すべての人に水を

ピースウォーターキャンペーンにご協力ください

PWJでは2007年、リベリアをはじめ世界各地で、水を重視した支援活動を進めています。PWJの活動に、ご協力をお願いします。郵便振替をはじめ、銀行振込、インターネット上でのクレジットカードによる寄付も可能です。

<郵便振替>

口座番号：00160-3-179641

加入者名：ピース ウィンズ・ジャパン

<ホームページ>

<http://www.peace-winds.org/>



このところ、「PWJの募金箱を設置したい」というお申し出やお問い合わせをいただくことが多くなりました。お店や学校、会社の受付などに募金箱を置いていただくと、活動資金の確保につながるだけでなく、多くの方に「ピース ウィンズ・ジャパン」という名前や活動を知っていただくきっかけにもなるので、本当にうれしいことです。

フランチャイズの商店を運営している方からは「いろんな活動を支援したいのでPWJの募金箱も置きたい」という連絡をいただきました。フランチャイズチェーンとしての募金先はあるそうなのですが、お店の方の気持ちで「ほかに」ということでした。



ホームページでPWJの募金箱のことを知ってくださる方も増えています。市内の別の店舗でみかけたPWJの募金箱とパンフレットがきっかけになって、設置を考えてくださった方もいらっしゃいます。支援の輪が確実に広がっているのを感じます。

なお、募金活動で間違いが起きないよう、PWJでは募金箱の設置場所をホームページで公開しています。また、募金箱の設置は、企業・団体・店舗・学校等に限定させていただいています。

<http://www.peace-winds.org/jp/support/box.html>

支援者サービスの窓

メディア掲載報告

(株)リクルートの就職情報誌「とらばーゆ関東版17号」(2007年4月18日発売)の「大転職しよう！人生変わった6人の「きっかけと決断」」で、PWJ国内事業部スタッフ高橋郁の体験談が紹介されました。

お知らせ

総会で2006年度の事業・決算報告を承認

PWJの2007年度通常総会が4月24日に東京事務所で開催され、2006年度の事業報告と決算報告が承認されました。また、公文教育研究会の杏中保夫相談役が新たに理事に就くことが承認され、退任する福田光博監事に代わって田中新吾・新監事が選任されました。

知っていますか？

リベリア (Liberia) の国名は、「自由な」を意味するラテン語 liberに由来するといわれています。1822年、アメリカで解放された黒人奴隷が、アフリカでの「再移住区」の建設を進めたことがリベリアの国の始まり。首都モンロビアは、モンロー主義で知られるアメリカ第5代大統領モンローにちなんでいます。解放奴隷の子孫たちは「アメリカ・ライベリアン」と呼ばれ、長い間、優位に立っていました。